

ジャグパル

JugPal

2005年10月2日 第31号



インタビュー

ヨーヘン・シェル Jochen Schell インタビュー

ドイツのジャグラー、ヨーヘン・シェル Jochen Schell さんと言えば、音楽とぴったり合ったディアボロとデビルスティックのルーチン、道具と一体になった流れるような身体の動き、まるでリングが自分の意思を持って動いているかのようにリングを操る演技、無言ながらも言いがたい不思議な存在感のあるキャラクターが特徴で、ジャグラーにも、大道芸・サーカス・ファンにも広く人気があるパフォーマーです。



Jochen Schell

半年前、たまたま彼の Web サイトを覗いてみたところ、ドイツ人である彼が日本の曲独楽をベースにしつつも彼独自の演技をしているビデオ・クリップを発見し、その美しさと独自性に強く感動するとともに衝撃を受けました。さらに、今年秋の静岡大道芸に出演のため再来日されるということで、あの美しく独特の演技はどのように作り出されたのか聞いてみたくてたまらなくなりインタビューをお願いしたところ、快く引き受けてくださり、外国語である英語にも関わらず、とても丁寧な答を長時間かけて書き上げていただきました。

内容が興味深いだけでなく、「自分にもっとも適した演技の作り方と考え方」など、参考になる点も多いと思います。お楽しみください。

[西川 正樹 <nishi-m@tkf.att.ne.jp>]

ジャグパルのためにインタビューに応じていただき、大変ありがとうございます。

Web サイトの履歴書を拝見しましたが、フランスのシャロン・シュール・マルヌ

“Chalons sur Marne” にある国立サーカス芸術学校 (Centre National des Arts du Cirque : CNAC) で学ばれたそうですね。ディアボロとデビルスティックの分野では、ヨーロッパにおける先駆者のひとりで、ヨーロッパで初めて同時に3つのディアボロを回せるようになり、1990年にはパリで開かれる有名な Cirque de Demain Festival で特別賞を受賞し、1995年の IJA チャンピオンシップでは第3位に入賞されています。

シャロンの CNAC で学ぶ前、ジャグリングやパフォーマンスを始めたきっかけは何ですか？

15歳か16歳のときに出席した退屈なパーティーからすべては始まりました。友達の1人がテニスボール3つをジャグリングして見せ、やがてパーティーの出席者全員がジャグリングを習い始めたのです。そのうちの何人かは、その後も練習を続けました。そして、私の友達やその他のジャグラー達が、毎週日曜日に地元の公園で集まるようになったのです。

私はボールとクラブを最初に練習し、そのあとでディアボロとデビルスティックを始めました。最初に使ったディアボロは小さなもので、直径が7センチぐらいしかありませんでした。しばらくして大きいディアボロを買い、この方が観客にはずっと良く見えて、しかも10倍ぐらい扱いやすいことを発見してからは、大きいディアボロに切り替えました。私がディアボロばかり練習しているのを見て、他のジャグラー達が「それって子供のおもちゃじゃないか」と冷やかすこともありましたが、やがてディアボロにはとても大きな可能性があることが分かってきました。それまで私がやっていたのは、箱の表面を引っ掻いていただけのようなもので、箱を開けてみると、中には素晴らしいものが詰まっていたのです。

ディアボロ2個を回せるようになり、回し始める方法、向きの調整方法、加速の方法もそれぞれいくつか発見したころには、ディアボロ3つを同時に回すことを考え始めました。3つ目のディアボロを投げ入れる装置を何台か自作してみても、熱心に練習したものです。

ちょうどその頃、お金を稼ごうとして、簡単な大道芸ショーを作って演じてもしました。でも、大道芸をやっているうちに、ジャグリングの技術は十分にあっても、自分の演じているショーは大道芸向きではないと考えようになりました。そこで、サーカス学校を捜し、結局はシャロンのCNACに行くことにしたのです。CNACでは、実践科に所属し、演技の作り方を主に学びました。CNACで学んだ期間は2年弱です。

ジャグリングとパフォーマンスを職業にしようと決意したのはどうしてですか？

学校を卒業し、兵役の代わりに社会奉仕義務を果たした後、大学に行って美術を学ぶことを考えていました。でも、そうはしないでジャグラーになりました。学校ではあまりよい生徒ではなく、向学心もありませんでしたが、自分の全精力を傾けて到達したい目標をジャグリングに見出したのです。そこで、シャロンのCNACに行くことにしました。

CNACで学んだことの中で、一番大切なことは何でしたか？

私にとって運が良かったことには、シャロンのCNACにはディアボロとデビルスティックを得意とするトッド・ストロング Todd Strong氏(アメリカ人:現IJA理事長)が居て、いろいろ教えてもらったり、相談したりすることができました。また、ダンス教師や振付師による訓練を受け、作曲家に音楽を作曲してもらいました。

CNACで主に学んだことは、「演技を創作するための方法」です。これは、後になってリングや独楽の演技を創り出すときに、とても役立ちました。

専門としてディアボロとデビルスティックを選んだのはどうしてですか？

その当時、ジャグラーにとってディアボロは比較的目新しい道具で、やっている人もあまりいませんでした。一方で、私にはディアボロが向いていて、同じ日のうちに新しい技をいくつも考え出しては身に付けることができました(ボール、クラブ、リングの場合は、そのように簡単にはいかず、苦勞していたものです)

私は、きれいなスタイルときれいな構造を持つ、技術的に高度な演技を作り上げたいと考えていて、デビルスティックとディアボロは、まさに私の目的に適していました。特に、ディアボロは私のためにある道具だったと言っても過言ではありません。ディアボロの演技をしているとき、私とディアボロは一心同体となり、ディアボロの動きと私の身体の動きが溶け合うような感覚がありました。時には、「これが禅で言うところの、三昧(ざんまい)の境地だろうか」とまで思ったものです。

しかし、それから何年か経って、他のジャグラー達の中にも3つのディアボロを回せる人がでてきて、私が持っていた技術レベルにジャグリング界が追い付いてくると、そのような感覚を感じる事が難しくなってきました。そこで、今までとは違う道具を使ってみたいと考えるようになりました。

あなたの Web サイトのビデオ・クリップを見ると、ディアボロとデビルスティックの演技は、1995年の IJA ラスベガス・フェスティバルで3位入賞したときの演技とほとんど変わっていないように感じましたが、それは正しいですか？それとも、実際はいろいろ変わっているのでしょうか？

1995年の演技は、ミスがほとんどなく音楽にぴったり合っており、神秘的なキャラクターがはっきりして、美しくも印象深いものでした。それから演技を変えていないのなら、それは何故ですか？

まさにその通りで、ディアボロとデビルスティックの演技は、それほど変えていません。どうしてかと言えば、最初に作り上げた演技がまさに理想の形であると思っており、その考えがずっと変わらなかったからです。

ディアボロとデビルスティックの演技のステージ・キャラクターは、いつ、どのように作り出されたのですか？

シャロンの CNAC に在籍しているときに、他の人に手伝ってもらって、あのステージ・キャラクターを考え出しました。「ディアボロ」と「デビルスティック」という道具の名前が発想のきっかけとなりました。

私自身はまじめな人間なので、黒がとてもよく似合い、黒い衣装を着ることにしました。その後、赤いボレロのような短い上着をその上に着るようになりました。ステージの上では、やや神秘的な雰囲気を出し、道具を意のままに自在に操る達人という印象を与えつつ、時には逆に道具が私を操るようにも見えるようにしたかったのです。

あなたのステージ・キャラクターは悪魔を意識しているのでしょうか？そうしてみると、メール・アドレスに 666 が入っているし、サイトの背景には竜が描かれているし、あなたを描いたイラストもちょっと悪魔っぽい感じです。

メール・アドレスの 666 は偶然といたずらの産物にすぎません。竜は空想上の獣で、その強い力で幸運を運んでくれます。あのイラストは、昔一緒に仕事をしていた友人が描いてくれたもので、とても気に入っています。そんなに深い意味はありませんよ。私は悪魔崇拝者ではありません。(笑)

それは失礼な質問をしてしまいました。ごめんなさい。

私の持っているあなたのイメージは、悪魔と言うより、「ロード・オブ・ザ・リング(指輪物語)」のエルフですね。力と知恵を備えた、優雅で美しく神秘的な、人間に近い異種の生き物です。

話は変わって、ディアボロの演技をするのをやめてしまったそうですね。それを知って、ショックを受けたんですが、どうしてですか？

15年も同じ演技をしてきたので、もう十分だろうと思うからです。ほとんど変えていないし、変えるつもりもない。そして、私の創造力を掻き立てる別の道具が見つかったので、変化や進歩を求めるなら、新しい道具を使う方向へ進みたいと思ったのです。しかし、デビルスティックの演技はまだ続けています。



そうですね。あなたのディアボロの演技の美しさに啓発され、今でもあの演技を好きなジャグラーがたくさん居ることを覚えておいてください。いつの日か、新しいアイデアと情熱とともにディアボロを再び取り上げてもらえるとうれしく思います。そして、その「創造力を掻き立てる別の道具」というのは？

その1つは、リングです。

木製の重いリングを作ってみることで、ディアボロを使い始めたころの気持ちに帰ることができました。つまり、実験をし、技を身に付け、遊び、道具を身体で感じる、という楽しさを再び感じられるようになったのです。そして、ディアボロの演技とはまったく違う、リングの演技を創り出しました。

ディアボロやデビルスティックに比べると、リングはジャグラーにとってずっと馴染み深い道具ですが、リングを面白いと思うようになったのはどうしてですか？

普通のジャグリング・リングでいろいろ試したり遊んだりしてみたところ、1本のリングを使ってコンタクト・ジャグリングのようなことをすることに興味を持ちました。リングをそのように扱うなら、重いリングを使う方がやさしいし、さらにより多くのことができます。また、特別なマットなどを使わなくてもリングが高ききれいに跳ねるようにしたいとも考えました。そこで、いろいろ試行錯誤を重ねた結果、木とゴムとシリコンとテープを材料に使ったリングを作り上げました。この特別なリングは、1組を作るのに4週間もかかるのですが、すぐ壊れてしまうこともときどきあります。

目的に適したリングを作り上げることができたので、次は、たくさん練習し、実験し、いろいろな可能性を探りつつ、リングの動きを身体や肌で感じるように心がけました。

そのような作業を進めていくうちに、「リングをジャグリングする部分をできるだけ減らした方が良い」ということが私にはわかってきました。たとえば、私のリングの演技の中で、もっとも観客に強い印象を与えるのは、2本のリングが宙に浮かんでいるかのように操る部分です。ここでは、物体であるリングと演者である私の間の相互作用が本当にとっても重要なのです。物体に過ぎないリングに生命を与え、リングが私を操っているかのように見せることを心がけました。

リングの演技を作るにあたり、Bob Bramson, Michael Moschen, Michael Menes, Vladimir Zarkov, ドイツの Marianne といった人達のリングやフープを使った芸については意識していました。これらのジャグラーの演技がとても完成されていたので、最初のうちは彼らの演技に含まれる技などと同じものを使うことには抵抗がありました。しかし、やがて考えを変え、必要なら彼らの技や演技の断片を自分の演技に取り込みつつ、さらに発展させることにしたのです。

以前の静岡大道芸でリングのルーチンを演じたときには、路上で演じたにもかかわらず、リングの不思議な動きに観客が惹き付けられ、催眠術をかけられたようになっていたのをよく覚えています。リングの他に、独楽の芸も演じられることを最近知り、びっくりすると同時に感心しました。あなたの独楽の芸は、とても美しい上に、日本の伝統的な曲独楽芸とはとても違って、独自性があります。独楽の芸はいつ始めたのですか？

自分で満足がいく独楽の芸を実際に演じるようになったのは去年からです。それまでは、技を開発して集めたり、いろいろ形の違う独楽を作ったりしていました。その間、パフォーマンスとして演じたことは何度かありますが、実験としてであって、あまり成功したとは言えませんでした。ショーを作り上げるために十分な数の技を開発し、それぞれの技に適した演じ方を見つけ出すためには、何年もの時間がかかりました。

独楽に興味を持ったのは、1988年にフランスのサーカスで、世界的に活動する日本人曲独楽師 筑紫こま鶴氏の演技を見て魅了されたのがきっかけでした。特に、投げ独楽を回し始めるところがとても美しかったです。紐を巻いた大きな独楽が5メートルくらい先まで放り投げられて、最後の瞬間に引き戻され、きれいな弧を描いて戻ってくる過程がきれいでした。

こま鶴氏に面会したのですが、独楽を見せていただくことはできなかったため、ろくろ(旋盤)を購入し、木を削って独楽を作る方法を独学しました。そして、こま鶴氏が使用していたのと似た形の独楽をいくつか作った後、いろいろな回し方を練習したり、形の違う独楽を作ってみたり、長時間回せるように軸の先端を工夫したりしました。今では、ショーの中の演目に合わせた、たくさんの種類の独楽を持っています。

そうやって、すべてを独学し、自分で研究せざるをえなかったことにより、独自性が強く、日本の伝統的な曲独楽とも大きく違う演技を作り出すことができたわけですね。結果的には、良かったのではないのでしょうか？

そうですね。独力で研究したことは良かったし、必要だったのだと思います。

私は、あなたのビデオ・クリップの中にあつた、短い棒をつなげて作った弧の先端に大きな独楽を載せ、顔の上にバランスして立てる技を見て、とても感動しました。とても美しい技であるとともに、日本の曲独楽では見かけない技です。しかも、その「短い棒をつなげて作った弧」は、日本の「南京玉すだれ」にそっくりなのですが、「南京玉すだれ」ってご存知ですか？

はい、あの道具は「南京たますだれ」が元になっています。日本で仕事をした際に、広島東急ハンズで「南京たますだれ」を買いました。説明書に図が描いてあり、日本人の知人に尋ねて、どんな風に使うのかを教えてくださいました。でも、残念ながら、「南京玉すだれ」を実際に演じている人を見たことはないのです。機会があったらぜひ見たいです。

あのバランス技は、どのようにして考え出したのですか？

もともとのアイデアは、長い弧の下に、回っている独楽を複数個吊るした巨大なモビール彫刻を組み立て、それをバランスして立てる、というものでした。でも、直径が2メートルくらいもある大きな弧や半円は、木で作っても金属で作っても、持ち運びがとても不便です。でも玉すだれを伸ばしてひねってやれば、いろいろな形を作ることができ、美しい弧を形作ることもできます。そこで、玉すだれの棒の本数を12本に減らし、代わりに1本の長さを延ばして、金属で作りました。

玉すだれを伸ばしてひねって弧を作り、端におもりとなるものを下げてやれば、弧の形はかなり安定します。でも、複数個の回っている独楽を吊るしたモビールを作ってみると、それをバランスして立てるのは不可能でした。重心が低い上に、重心自体が移動するからです。その問題を解決するため、弧のてっぺんに重いものを置き、独楽の数も減らすと、バランスして立てることも不可能ではなくなってきました。

最終的には、玉すだれ的一端を顔の上に立て、その先端に、回っている大きな独楽を立てるという現在の形に落ち着きました。単純かつ美しい解だと思っています。

それはとても興味深い話です。技を考えるのではなく、美しい物体を作ることを先に考え、その後で実現の可能性を探って言ったわけですね。

実は、日本の曲独楽にも「弓張り」と言って、よくしなる長い竿を手にとって、その先端に独楽を載せ、作り出される弧の美しさを見せる芸があります。

でも、あなたの技は顔の上に立てるので、「弓張り」よりもスリルがありますね。

そうですね。「弓張り」には、わたしの技と共通するものがありますね。「弓張り」を描いた絵を見たことがあるのですが、玉すだれを使った自分の技を開発していたときには、「弓張り」のことは知りませんでした。

あなた以外に、ドイツやヨーロッパに独楽の芸をする人はいますか？あるいは、過去にいましたか？

いいえ、私の知る限りではいません。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、日本の曲独楽師や太神楽師がヨーロッパで興業をしていますが、その影響は残っていませんか？

20世紀初頭の日本人芸人の絵や写真はいくつか見たことがあります。この時代のヨーロッパの芸人が、ショーをより面白くするために日本風の衣装を着ていた例もあったはずですが。

ディアボロと独楽の間には、パフォーマーの視点から見て違いと言うものはありますか？

私にとっての違いですが、ディアボロは、パフォーマンスを中断せず、音楽に合わせた流れるようなルーチンを作る用途にはとても適しています。一方で、独楽は一度回してしばらくすると止まってしまうので、ショー全体をいくつかの部分に分け、芸に合わせて独楽や補助の道具を取り替えながら芸を1つずつ演じていく、という形をとらざるをえません。

一方で、回転しているディアボロそのものには、面白みはありません。ディアボロを演じるパフォーマー自身、演じる技、身体の動き、ダンス、見せ方、といったものが観客の注意を惹き付けるのです。反対に、ただじっと静止して回っている独楽の姿は、世界中のどの文化圏においても人々を魅了する力があります。もちろん、ただ回っている独楽を見せるだけではショーになりませんが、回っている独楽の魅力は大きな力となります。

あなた自身のことも教えてください。今、おいくつですか？

今、40歳です。パフォーマンスの仕事は1990年から続けています。

ジャグラー、パフォーマーを仕事として続けている理由は何ですか？仕事に対する意欲はどのように保っていますか？

まず、ジャグリングは私にとって今でも面白いことなのです。そして、パフォーマンスをすることは常に挑戦ですし、実現したいと思っているアイデアもたくさんあります。

尊敬するジャグラー、好きなジャグラーは誰ですか？

一番尊敬しているジャグラーは、故フランシス・ブラン Francis Brunn とマイケル・モーシオン Michael Moschen です。

フランシスは、ステージ上ではエネルギーの塊で、動きは常に正確であり、フラメンコそのものでした。フラメンコ音楽を伴奏に使った彼の芸は、本物のフラメンコ・ダンサーの多くよりも、フラメンコの精神を表現していたと思います。マイケル・モーシオンは、扱う道具そのものに新しい意味を与える人です。パフォーマンスにおいて観客の関心を惹きつけるためには、演技者の存在がどの程度見えている必要があるかを正確に把握しており、彼自身は一步引いて道具の影に存在を隠してしまいます。

お仕事はどこですることが多いですか？

私は、ドイツのヴァリエテ Variete(さまざまなパフォーマンスを見せる劇場)で仕事をすることが多いです。しかし、スイス、フランス、イタリア、スペイン、アメリカ、中国、日本といった各国で、サーカスに出演したり、ステージ・ショーに出たりしたこともあります。

ドイツの雑誌 Kaskade によると、ドイツではジャグラーやサーカス・パフォーマーの仕事が増えているそうですが本当ですか？

ある意味では正しいです。1990年に私が仕事を始めてから、新しいヴァリエテがいくつかオープンしましたし、冬季にはディナー・ショーの仕事がたくさんあります。でも、その一方で旧ソ連圏の国々から流れてきたアーティストの数も増えているので、仕事を取るのが簡単になったということはないですね。

静岡大道芸フェスティバル以外では、路上での仕事はしないのですよね？

はい、路上での仕事は、静岡以外ではしません。

劇場でのパフォーマンスと路上でのパフォーマンスに違いはありますか？

通常は、大きな違いがあります。劇場では、観客にパフォーマンスを見る心構えができていますし、給料は劇場主が支払います。路上では、観客と直接に接する必要があります。パフォーマー自身が観客を集め、惹きつけ、お金を払わせなければなりません(ちょっと単純化しすぎですが、おおむね正しいです)。



静岡の場合は、事情がまったくちがいます。フェスティバルの運営がきちんとしているので、観客の注意を引いて集めるところから始める必要がありません。そういう意味では、劇場に近いともいえます。もちろん、雨、風、太陽、地面といった要素の影響はうけますけれど。

今年秋の静岡大道芸のため再来日されるそうですが、何を演じられるのでしょうか？

独楽の芸だけを演じるつもりです。これから静岡までの数週間を使い、普段より長いショーを作るため、新しいアイデアをいくつか実現しようと思っています。また、独楽を全部収納し、パフォーマンス中は道具スタンドとしても使えるケースを作る必要もあります。荷物を35キログラム以下に抑えないといけないので、そこを何とかしないとけません。

日本の観客にメッセージはありますか？

日本で独楽の芸を演じることは、私にとって実験であり挑戦です。日本の他には、独楽を回すことを芸として演じ、ショーとして見せる文化はありません。そこへ今回、ドイツ人である私が、たとえば日本刀の刃の上で独楽を回すといったような芸を見せに行くわけですから、私のショーを皆さんが楽しんでくださるかどうか、楽しみであると同時に心配です。

日本のジャグラー達にメッセージをお願いします。

美術、音楽、演劇、オペラ、MTV、自然を楽しみ、自分の生き方に自信を持って生きてください。そして、他にも500人ぐらいものジャグラー達がやっているような、ありふれたパターンをジャグリングするようなことは避けましょう。エンジョイ・ジャグリング！

大変長い時間をインタビューに費やしていただき、大変ありがとうございました。静岡でのパフォーマンスを楽しみにしています。

Jochen Schell さんのサイト: <http://www.jochenschell.de/> (ドイツ語と英語)

[西川 正樹 <nishi-m@tkf.att.ne.jp>]

編集後記

西川さん、いつもの事ながら今回も本当にお世話になりました。これだけ充実したインタビュー記事に仕上げてください、私を含め読者の皆さんも大喜びだと思います。ヨーヘン・シェルさんが来日する前に発刊できてこれもタイムリーで、静岡での演技が本当に楽しみになりました。ヨーヘン・シェルさんと西川さん、本当にありがとうございました。

ジャグパルは私という個人が野次馬根性丸出しで、単なる趣味として発行して、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人に関係しているものではありません。

編集発行人: 安部保範(神奈川県横浜市栄区 在住)

Webサイト JugPal <<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

見世物広場 <<http://www.chansuke.net/>>

E-mail: chansuke@chansuke.net